当院における漢方診療の実際

「先進漢方治療センター」の現状とこれから

久留米大学医療センター 副院長/先進漢方治療センター 教授 **惠紙 英昭** 先生

1987年 久留米大学医学部 卒業、同学 神経精神医学講座 入局
1992年 大牟田市立病院 精神科 部長
2000年 久留米大学医学部 神経精神医学講座 講師
2009年 同 先進漢方医学講座(寄附講座) 准教授、
久留米大学医療センター 先進漢方治療外来 科長
2013年 同 先進漢方医学講座(寄附講座) 教授
2014年 久留米大学医療センター 副院長 先進漢方治療センター
教授(神経精神医学講座兼務)

かつては軍都として栄えた福岡県久留米市は、わが国のゴム加工産業の発祥の地として、さらに現在では人口10万人あたりの医師数が全国トップクラスの「医者のまち」としても知られている。久留米大学医療センターの「先進漢方治療センター」は、西洋医学に加えて漢方の研鑽を積んだ医師が、他診療科とも連携しながら西洋医学的診断を行い、東洋医学的な診断も取り入れた漢方治療を行っている。患者さんの幸せを第一義に診療されつつ、さらに若手医師の育成にも力を注いでおられる先進漢方治療センター 教授の惠紙英昭先生に、センターにおける現在の取り組みとこれからについてお伺いした。

“先進漢方治療センター”の発足と現況

かつての陸軍病院を前身とする国立久留米病院は、1994年に久留米大学に移譲され、新たに久留米大学医療センターとして発足しました。開設当初は総合病院としての診療体制を整備していましたが、久留米大学病院(以下、大学病院)との機能分化により、2015年に診療体制が大きく変わり、あわせて「先進漢方治療センター」も開設されました。当院における漢方診療は2009年からすでに始まっていましたが、当時は小児外科主任教授の八木實教授(現、久留米大学病院長)と私を含め4名の体制で、それぞれが大学病院との兼務での診療をしていました。

当センターは他施設とは異なり、名称のとおり“センター化”しているという特徴があります。一般に「漢方外来」というと一人の漢方専門医があらゆる患者さんを診療されます。しかし当センターでは、外来を担当している各医師がそれぞれの専門領域における西洋医学的な診断に基づいて、時には西洋医学的治療を優先したり、漢方医学的診断を行い漢方治療を進めながら西洋医学的治療を組み合わせる、複数の漢方処方を併用するなど、患者さん個々に応じた適切な医療をご提供しています。

現在、当センターでは精神科、内科、産婦人科、皮膚科、泌尿器科、循環器科の専門医で、ほとんどが漢方専門医に認定された医師が診療を行っています。今後さらに、この他の診療科の漢方専門医にも参画していただくことで、より幅広く多くの患者さんを診療できる、特徴あるセンターの構築を目指しています。

当センターにおける漢方治療

当センターでは、各領域でしっかりと研鑽を積まれた専門医であり、漢方専門医に認定された方であることに加え、漢方薬の構成生薬の薬能・薬性をきちんと理解しながら、“既成概念”にとらわれない、自由な発想で治療ができる医師が診療にあたっています。この背景には、山本巌先生の教えにもあるように、各処方の構成生薬の薬能・薬性をきちんと理解し、さらに患者さんの病態に応じて服用量の加減や頓用、他剤との併用などを組み合わせることが重要であるという考えがあります。

それを象徴する数字として、当センターで現在(2017年5月)、採用されている漢方薬の品目数は224種類(漢方エキス製剤：206、煎じ薬：18)にものぼります。なぜ、これだけの数を揃えているかというと、たとえばエキス製剤は同一処方名でもメーカーによって構成生薬の種類(白朮・蒼朮、など)や1日服用量中に含有するエキス量などが異なり、その違いが薬効にも現れるからです。管理が大変と思われるかもしれませんが、患者さんの症状や病態のわずかな変化に応じて適切な製剤を選択することができます。

このように、西洋医学的な専門知識を有する医師の適切な判断と、薬能・薬性を考慮した漢方処方を組み合わせることで、より再現性のある薬物療法が成り立ちますし、その結果は患者さんの治療満足度、ひいては幸せにもつながると思います。

自らが体験した漢方薬の効果

私は医学部卒業後に精神神経科に入局しましたが、将来の精神科医療が大きく変わっていくであろうと考えていたことに加え、“他の医師がやっていないことをやろう”という思いもあって漢方の勉強を始めました。まず、精神神経科のOBで山本巌先生のお弟子さんでもある故 福冨稔明先生の漢方勉強会に定期的に参加しました。

さらに、私自身が漢方薬を服用することで、その効果を実感しました。当時の私はいわゆる「フクロウ型」体質だったのですが、福冨先生から苓桂朮甘湯の服用を勧められました。早速服用したところ、驚くほど体調が改善したのです。このような自身の“健康体験”で漢方薬の効果を強く実感したこともあり、さらに山本先生の勉強会にも参加するなど引き続き勉強を続けました。

がん患者さんの治療に用いる補剤の使い方

現在は当センターにおいて、精神科領域の患者さんを中心にしながら、がん患者さんなども含めて幅広く診療しています。

がん患者さんの治療において、人参・黄耆の疲労感の改善効果や食欲増進作用を基本に、がん患者さんの病態に応じて主に六君子湯・補中益気湯・十全大補湯・人参養栄湯といった補剤を使い分けています。食欲が低下しているときには六君子湯、食欲不振に加え全身倦怠感が強い場合は補中益気湯、さらに四物湯が必要な血虚の病態であれば十全大補湯を選択しますし、五味子・遠志が配合されている人参養栄湯は精神安定化作用および呼吸器症状の改善効果も期待して処方します。ただし、人参単味では量の加減によって腫瘍増悪作用の可能性を示唆する報告もあるので、駆瘀血剤や慢性炎症の併存を考慮して一貫堂の竜胆瀉肝湯などを併用しています。

がん治療において補剤は有用ですが、その使い方についてはエキス製剤の用法・用量という既成概念にとらわれることなく、たとえば抑うつ気分があれば半夏厚朴湯や茯苓飲合半夏厚朴湯をベースにしながら、朝はだるいが昼は大丈夫ということであれば朝だけ補中益気湯を服用していただく、また朝に食欲がないならば朝のみに六君子湯を服用していただくというように、患者さんの状態に応じた自由な発想での処方が良いと考えています。もちろん、各処方の構成生薬の薬能・薬性をきちんと理解した上で、患者さんの病態にあった組み合わせが必要であることは言うまでもありません。

図　氷漢方の作り方

● 準備するもの

- 溶解用容器
  100mL以上入る蓋付きの耐熱容器
  例：ホット用ペットボトル
- 製氷皿(患者が食べやすいサイズ)
- お湯：40mL(ポットのお湯で可)
- 水：60mL

● 作り方

① 溶解用容器に漢方薬1包とお湯40mLを入れ、薬がしっかり溶ける(薬の粒が見えなくなる)までよく振る。
② ①に水60mLを追加する。
③ ②を製氷皿に氷10個前後(食べやすいサイズでよい)になるように均等に流し込み、冷凍庫で凍らせる。

＊溶かすときに最初からお湯100mLで溶き、②を省略しても可です。
＊お湯を使用するので、やけどには十分注意。

久留米大学病院薬剤師 冨田 康裕 先生 作成

漢方薬には用量依存性があります。たとえば7.5g/分2の製剤は同量の分3製剤に比べ1回の服用量が多いので、服用後の立ち上がりが早いと感じます。また、用法・用量どおりの処方では十分な効果が得られずに漢方の効果を実感できないという先生の声をお聞きすることがありますが、その処方で多少の反応があるなら、たとえば1回1包、1日3回服用を、朝2包・夕1包というように、効かせたい時間に多く服用するというような服用量の加減も有用な場合があります。

漢方薬の服用方法の工夫もしています。その一例で、がん患者さんは抗がん剤やオピオイドを処方された際に食欲低下、嘔気・嘔吐を呈する場合がありますが、そのような患者さんには「氷六君子湯」を服用していただきます(**図**)。この方法によって、水分補給と六君子湯を服用できるというメリットがあります。また、施設によっては吐き気に五苓散、最近では口内炎に半夏瀉心湯を凍らせる治療も行われています。

漢方のすそ野を広げる

漢方専門医を目指す専攻医や前期臨床研修医が陪席して研修をしています。また医学生の自主学習や漢方サークルのサポートも行っています。本学で研鑽を積んでいる若手医師には診療科の垣根を越えて漢方の勉強していただき、それぞれの専門領域において漢方を有効活用していただきたいと思っています。また、ある程度西洋医学的な研鑽を積まれた医師には、漢方の薬能・薬性のわかりやすい理解の仕方と使い方をお伝えし、各領域において漢方治療を組み入れていただくことで、患者さんの幸せにつながることを期待しています。

当センターが、より多くの先生に参画していただくことで発展することはもちろん、漢方に興味を持った若手医師を一人でも多く育てることで、漢方のすそ野が自然と広がることを願っています。